琉球大学学術リポジトリ

# 近世後期における琉球国の社会経済史研究－人口・貨幣・物価を中心に －



| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 琉球大学<br>公開日: 2022-05-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 比嘉, 吉志<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017928 |

様式第１９号

# 学位論文要約

目次

序章
　第１節　近世琉球の社会経済史
　　第１項　停滞する社会経済史
　　第２項　社会経済史の研究動向
　　第３項　他分野からの経済史叙述
　第２節　近世後期の疲弊史像
　第３節　本論文の課題と構成
第１章　近世後期の琉球における人口
　第１節　近世琉球における人口研究の論点
　　第１項　1879 年の人口激増をめぐる議論と論点
　　第２項　宗門手札改と人口をめぐる問題
　　第３項　1873 年以前における女性人口の欠失
　　第４項　1879 年以前の欠失人口の推定
　第２節　近世琉球における人口推移の地域性について
　　第１項　18 世紀までの総人口・地域人口の推移
　　第２項　19 世紀の人口増加
　　第３項　増減する 19 世紀の人口
　第３節　近世琉球後期の人口増加論
　　第１項　飢饉・疫病年と人口推移
　　第２項　近代統計資料からみる近世の人口情報
　　付表
第２章　近世後期の琉球における貨幣
　第１節　近世琉球の貨幣論
　　第１項　金属貨幣（銭貨）
　　第２項　実物貨幣（米穀）
　　第３項　信用貨幣（掛け売り・掛け買い）
　第２節　近世琉球における銭貨政策の変遷
　　第１項　二つの銭貨―鳩目銭と京銭
　　第２項　銭貨政策の転換―鳩目銭から京銭へ
　第３節　19 世紀後半の銭貨をめぐる混迷―唐銭・新鋳銭貨
　　第１項　二つの「唐銭」流入とその後
　　第２項　琉球藩期の新鋳銭貨問題
第３章　近世後期の琉球における物価
　第１節　近世琉球における物価研究の前提
　　第１項　物価史料の性格について
　　第２項　王府の物価政策
　　第３項　長期的な推移の傾向
　第２節　「諸物代付帳」と公定価格制度の研究
　　第１項　公定価格制度に関する諸論点

第２項　公定価格制度と仮定代
第３項　代銭支払いと請人について
第３節　「文替り」と物価の高騰
第１項 「文替り」研究の論点と課題
第２項 「文替り」の発生と経過
第３項 「文替り」による混迷
終章
第１節　近世後期の琉球国における人口・貨幣・物価
第２節　人口・貨幣・物価から見る近世後期の社会経済
史　料
参考文献

## 序章

琉球史と呼ばれる歴史研究の源流は、20 世紀初頭の沖縄学の担い手たちにまで遡る。その後、沖縄戦と米軍統治時代、日本復帰という歴史的経験を経ながら、現在の琉球史は「日本史」や「郷土史」の枠に留まらない独自の位置を占めるようになった。かつての伊波普猷や東恩納寛惇といった研究者らは、近世（1609～1879 年）の琉球国は薩摩藩の対中国貿易のための「機関」や「傀儡」に過ぎないと見做していた。戦後の琉球史研究は「幕藩体制の中の異国」、次いで琉球(国／王府）の「主体性」や「自律性」を核にした歴史像を打ち出していく。この間の実証研究の進展は目覚ましく、史料の発掘と整備により、対外関係史を含め政治・社会・文化に関する様々なテーマが取り上げられてきた。

本論文は、近世後期（18 世紀半ば～19 世紀末）という時代の社会経済史（人口・貨幣・物価）が研究テーマである。

琉球史の社会経済史研究は、復帰前後までは土地・租税・農民層分解といったマルクス主義歴史学の影響が色濃く反映されたものだった。1980 年代以降にマルクス主義歴史学の影響力が停滞し、中琉関係史を中心とした対外関係史が飛躍的に進展するなかで、次第に那覇の社会経済や対外貿易へと研究の関心が移っていく。2000 年代からは民衆史や生業といったテーマに注目が注がれ、近世琉球の社会経済史研究はその対象を広げつつ現在まで一定の蓄積がある。一方で、その間に社会経済史全体で活況のあった人口・貨幣・物価に関する研究は、復帰前後の水準にとどまっている。また、近世後期の疲弊史像を語るさいにその象徴とされるのが人口の問題であり、社会経済の停滞や後進性を語る際にも貨幣や物価の問題が取り上げられてきた。紋切り型な近世後期の疲弊像と社会経済の停滞や後進性を再考するうえで、人口・貨幣・物価に関するそれぞれの実証研究を進める必要がある。

## 第１章　近世後期の琉球における人口

第１章では、社会経済を構成するうえで重要な指標となる人口について検討した。最初に、近代統計資料との接続を考慮して近世の人口史料を批判的に捉え、実際に 18 世紀の後半以降は女性、屋取士族、身売り人、沖縄島の百姓といった人々が欠失していたことを示した。これは、先行研究で定説となっていた近世後期の人口減少論に再検討を迫る結果である。

総人口は 18 世紀半ばの 20 万人前後から 1880 年までに 35 万人台にまで増加したが、地

域別の推移は異なっていた。最も増加率の高かったのが沖縄島であり、なかでも中頭方は屋取集落の発生と成長から抜きん出るほどの高い増加率が確認された。町方人口は那覇を中心に 19 世紀も人口増加はゆるやかに続いたが、首里の人口は 18 世紀後半までの増加ペースから減退しており、これまで考えられてきた首里を中心とした人口増加は史料の誤読によるものであることを論証した。一方で、宮古・八重山と久米島といった離島地域は 19 世紀前半まで顕著な減少期と停滞期が続いた。中頭方と八重山を比較すると、出生率を引き下げる社会環境の問題が背景にあると考察した。

また、飢饉・疫病が発生流行した年を飢饉・疫病年とし、人口推移との連関を検討した。合わせて、近代統計資料から 1883 年と 1886 年の沖縄県総人口の男女年齢別の人口ピラミッドを作成し、近世末の人口史料から石垣島の石垣村（1873 年）、多良間島の塩川村（1877 年）も同じく人口ピラミッドを作成した。それを見ると、確かに飢饉・疫病年はその前後の生年人口と比べて減少傾向を確認できたが、同時に平常年が継続して人口の回復・増加も認められる人口構造であった。飢饉・疫病年の影響は当年また翌年に人口減少として表れたが、これは当年の場合は乳幼児死亡率の上昇、翌年の場合は意識的に飢饉・疫病年を避けて妊娠行動を抑制し翌年に延期した結果を反映したものである可能性に言及した。

## 第２章　近世後期の琉球における貨幣

第２章では、近世琉球の貨幣論を提示したうえで、王府の銭貨政策を検討した。従来は金属貨幣に限定された議論になっていたが、実物貨幣と信用貨幣という貨幣の有り方を認め、史料に即してその性格・機能・変遷について記述した。金属貨幣は銭貨に焦点を絞り、鳩目銭と京銭について概略した。京銭は琉薩間の民間売買で使用されるだけでなく、17 世紀後半以降は町方を中心に流通が広まった。実物貨幣は米穀が基本で、宮古では粟、八重山では米が使われた。信用貨幣は掛け売り・掛け買いという形で史料に出てくる。これまではその暴力性や高利貸し的な性格が重視されていたが、金属貨幣と実物貨幣が不十分ななかで物品の交換を成立させたという役割も見出せる、と指摘した。

王府の銭貨政策はこれまで通時的な研究がおこなわれてこなかったため、簡易的な時期区分を設定したうえで、各々の転換期と琉球・薩摩それぞれの意向を考察した。京銭が 17 世紀の後半には琉球に流入し流通するようになるも、王府の基本的な銭貨政策は鳩目銭と京銭の併用であった。それが 1694 年に薩摩藩からの「新鋳銭貨壱萬貫鋳調」却下、1702 年の京銭使用停止令という事態に見舞われ、鳩目銭を基軸に銀子も併用する銭貨政策に変更を余儀なくされた。しかし、鳩目銭の受領性はいくら王府が政治的な信用を付与しようとも高まらず、1714 年には薩摩藩に願い出て京銭の使用を再開せざるを得なかった。薩摩藩でも琉球への京銭流出を問題視し、琉球で独自に流通する銭貨を鋳造して京銭と併用することが王府に打診された。琉球側の対応は、すでに安定して琉薩間の民間ルートの売買を担っている京銭の使用継続を望み、独自の銭貨鋳造を望まなかった。

18 世紀後半からは寛永通宝の鉄銭や真鍮四文銭が那覇を中心に流入し、19 世紀以降は欧米人が持ち込んだスペインドル銀貨や唐銭も加わった。近世後期の町方は多様な銭貨が飛び交う状況にあったのである。また、唐銭は直接に清から持ち込まれた私鋳銭の存在も推測され、銭貨流入また流通量はより活発なものになっていたと考えられる。1860 年代以降のインフレによって薩摩からの京銭流入が滞るようになると、琉球内でも銭貨不足が問題になった。1873 年にはこの事態を解決しようと琉球独自の「新鋳銭貨」を鋳造するべきか否か王府内で議論になるが、銭貨鋳造にかかる財政や諸々の負担、地金の安定的な確保などを理由に見送られた。近世後期に顕著となる京銭の供給不足とインフレ、多様な銭貨の

流入とその使用は、町方における銭貨経済の伸長を示唆している。

## 第３章　近世後期の琉球における物価

第３章では、近世琉球の物価に関する問題を考察した。琉球の物価研究は何よりも史料が圧倒的に不足しているという問題がる。そのため、研究の前提となる既出史料の性格を分類し、王府の物価政策と長期的な物価推移の傾向について検討した。王府の物価政策は穀物価格が高騰するなかで、焼酎（泡盛）の製造制限や強制的な米価の引き下げをおこなうも、物価を十分にコントロールすることができなかった。市場価格を統制すると、物流や売買を滞らせる結果となったのである。また、米価・甘藷の価格・労賃（工賃）といった限られたものではあるが､いずれも 19 世紀にかけての上昇傾向が史料からは確認できた。

物価に関連して「諸物付代付帳」と公定価格制度についても検討した。従来の研究では、18 世紀前半に設定された「諸物付代付帳」の代銭は 19 世紀に至っても変更されなかったといわれる。夫銭として物品を徴税される農民層は、18 世紀以降に市場価格は上昇したものの、「諸物付代付帳」の価格が前代のまま据え置かれたため、安価で徴税され不利な状況にあったというのだ。しかし、具体的に「一諸品定代付、一同有所付」（1728 年）と「野菜肴有所節付幷代付帳」（1845 年）を比較すると、「仮定代」によって代銭の引き上げがおこなわれている物品も確認できた。夫銭の物納では、余剰分の納入による代銭（現銭）支払い、諸雑物達を間切・村の代わりに調達する請人の存在についても指摘した。

1860 年代以降の度重なる銅銭と鉄銭の換算率の変更である「文替り」は、これまで多くの研究がある。ただ、その当時の史料的制約によって同時代史料の利用が十分ではなかった。はじめに、公刊されていなかった金光玉の研究を重要なものとして位置づけた。また、先行研究では「文替り」が琉球に適用されたのは薩摩藩が搾取する政治経済的な意図からであると評されてきたが、同時代史料からは国外への銅銭流出を防ぐために王府も積極的に推進していた様子が明らかになった。「文替り」によるインフレは町方で顕著に表れていたようで、王府が物価統制をおこなうと、利益を減らされた田舎人（町方に食糧を売りに来る周辺地域の人々）が品物を売りに来なくなり、食糧不足が問題になった。「文替り」によって銭貨経済のある程度浸透した町方ではインフレによる経済混迷で苦しむ人々が多数出ていたが、自給経済を基礎に持つ田舎間切（沖縄島地域）では影響は少なかったという。これは同時代人である那覇の士が書き記した日記（福地家日記）の記述だが、旧慣調査資料や『球陽』といった歴史書など二次資料とは異なる問題が見受けられた。

## 終章

実物貢納制としての指令経済だけでなく、琉球社会とくに町方以外の地域は土地を基礎とする自給経済の存在、ユイマールや模合など共同体や個人間の慣習経済といった様々な一面を持つ。当時の琉球が完全な市場経済のシステムをもつ社会であったと主張する論者はいないが、全くの自給経済・慣習経済・指令経済であったという極端な論者もいないだろう。銭貨政策で京銭の流通を堅持する態度も、王府や薩摩藩といった政治権力の及ばない民間売買の海運ルートが持つ影響力を無視しえなかったからである。物価政策が十分な成果を挙げられなかった要因も、需給関係に基づいた市場原理が政治権力の介入を拒んだためである。当然これらは部分的な事例分析で、町方経済の論理でもあるが、近世後期の社会経済史において重要な論点となろう。

町方における市場経済の伸長が貨幣・物価から僅かでも跡付けられるとするならば、それは沖縄島の人口増加にどのような影響を与えたのか、あるいはその影響を受けたのだろ

うか。総人口の増加がそのまま生産力の増加を意味したならば、それに応じて貨幣需要も高まって多様な銭貨の流入と流通を社会に呼び込み、実物貨幣や信用貨幣の使用もより促されたはずである。なかでも、信用貨幣の伸長は掛け売り・掛け買いだけでなく、借金（証文）や身売り、模合といった事象にも表れただろう。このような社会経済の変化は長期的な物価推移のなかで、19 世紀の段階的な上昇傾向とも接合する。ただ、これを近世後期における市場経済の萌芽と評価して経済成長を謳うのではなく、複雑な要因のからむ疲弊史像を解きほぐす一助としなければならない。

## 史料


石垣市総務部市史編集室『石垣市史叢』1 慶来慶田城由来記 富川親方八重山島諸取締帳（石垣市役所、1991 年）
石垣市史総務部市史編集室編『石垣市史叢』2 与世山親方八重山島規模帳（石垣市役所、1992 年）
石垣市総務部市史編集編『石垣市史叢書』7 翁長親方八重山島規模帳（石垣市役所、1994 年）
沖縄県立図書館資料編集室編『沖縄県史』前近代 6 首里王府仕置 2（沖縄県教育委員会、1989 年）
沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編『沖縄県史』資料編 7 伊江親方日々 近世 1（沖縄県教育委員会、1999 年）
沖縄県教育庁文化財課史料編集班『沖縄県史』資料編 22 ベッテルハイム原文 Part2（1852-54）、近世 3（沖縄県教育委員会、2012 年）
沖縄市史編集事務局編『間切公事帳の世界』（沖縄県教育委員会、1987 年）
沖縄県立芸術大学附属研究所編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇)』第 1 巻 美術・工芸（沖縄県立芸術大学、2004 年）
沖縄県立芸術大学附属研究所編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇)』第 2 巻 民俗・宗教（沖縄県立芸術大学附属研究所、2006 年）
沖縄県立芸術大学付属研究所編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇)』第 3 巻 歴史・文学（沖縄県立芸術大学付属研究所、2015 年）
沖縄県立芸術大学付属研究所編『鎌倉芳太郎資料(ノート篇)』第 4 巻 雑纂篇（沖縄県立芸術大学付属研究所、2016 年）
沖縄歴史研究会『蔡温選集』（星印刷出版部、1967 年）
小野武夫編『地方経済史料』第 10 巻（近世地方経済史料刊行会、1932 年）
小野まさ子・里井洋一・豊見山和行・真栄平房昭「「内務省文書」とその紹介」（『史料編集室紀要』12 号、沖縄県立図書館史料編集室、1987 年）
小野まさ子・漢那敬子・早瀬千明「〈史料紹介〉伊平屋新垣家文書―解題および翻刻―」（沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄史料編集紀要』第 40 号、沖縄県教育委員会、2017 年）
鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料』旧記雑録追録 1（鹿児島県、1971 年）
鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料』忠義公史料 第 1 巻（鹿児島県、1974 年）
鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料』忠義公史料 第 5 巻（鹿児島県、1978 年）
鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料』忠義公史料 第 6 巻（鹿児島県、1979 年）
鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料』旧記雑録後編 4（鹿児島県、1983 年）
鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料』薩摩藩法令史料集一（鹿児島県、2004

年）
鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料』薩摩藩法令史料（鹿児島県、2007 年）
鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料』薩摩藩法令史料四（鹿児島県、2007 年）
球陽研究会編『球陽（読み下し編）』（角川書店、1974 年）
黒島為一「≪史料紹介≫『公事帳』(『規模帳』)」（『石垣市立八重山博物館紀要』第 14・15 号合併号、石垣市立八重山博物館、1997 年）
崎浜秀明編『蔡温全集』（本邦書籍、1984 年）
下郡剛編『沖宮天燈山石碑と『伊地知大膳覚書―当間親雲上重陳関係史料―』（日本史史料研究会、2020 年）
高良倉吉・赤嶺守・豊見山和行編『國立臺灣大學圖書館典藏 琉球關係史料集成』第 1 巻（國立臺灣大學圖書館、2013 年）
多良間村史編集委員会編『多良間村史』第 2 巻資料編 1 王国時代の記録（多良間村、1986 年）
那覇市総務部市史編集室編『那覇市史』資料篇 第 1 巻の 2 琉球薩摩往復文書（那覇市役所、1970 年）
那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇 第 1 巻 7 家譜資料⑶首里（那覇市教育委員会、1982 年）
那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇 第 1 巻 8 家譜資料(4) 那覇･泊系（那覇市企画部市史編集室、1983 年）
那覇市経済文化部歴史資料室編『那覇市史』資料篇 第 1 巻 9 近世那覇関係資料（那覇市、1989 年）
那覇市企画部文化振興課編『那覇市史』資料篇第 1 巻 10 琉球資料(上)（那覇市役所、1991 年）
那覇市企画部文化振興課編『那覇市史』資料篇第 1 巻 11 琉球資料(下)（那覇市役所、1991 年）
那覇市市民文化部歴史資料室編『那覇市史』資料編 第 1 巻 12 近世史料補遺・雑纂（那覇市市民文化部市史編集室、2004 年）
西里喜行・赤嶺守・豊見山和行編『國立臺灣大學圖書館典藏　琉球關係史料集成』第 2 巻（國立臺灣大學圖書館、2014 年）
西里喜行・赤嶺守・豊見山和行編『國立臺灣大學圖書館典藏 琉球史關係料集成』第 3 巻、（國立臺灣大學圖書館、2016 年）
西里喜行・赤嶺守・豊見山和行編『國立臺灣大學圖書館典藏 琉球史關係料集成』第 5 巻（國立臺灣大學圖書館、2018 年）
名護市教育委員会文化財課編『名護市史資料編五 文献資料集五 羽地にみる土地・租税制度 下巻』（名護市役所、2009 年）
平良市史編さん委員会編『平良市史』第 3 巻資料編 1 前近代、平良市役所、1981 年）
法政大学沖縄文化研究所編『琉球八重山嶋取調書』（法政大学沖縄文化研究所、2004 年）
法政大学沖縄文化研究所編『旧記書類抜萃・沖縄旧記書類字句註解書』（法政大学沖縄文化研究所、2010 年）
外間守善・波照間永吉編『定本 琉球国由来記』（角川書店、1997 年）
宮古島市教育委員会文化振興課編『宮古島市史叢書 3　与世山親方宮古島規模帳』（宮古島市教育委員会、2010 年）

山里純一（研究代表者）『琉球の家礼に関する書誌学的・文献学的研究』（琉球大学、2010年）
琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』第 1 巻（浦添市教育委員会、1988年）
琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』第 8 巻（浦添市教育委員会、1992年）
琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』第 9 巻（浦添市教育委員会、1993年）
琉球王国評定所文書編集員会編『琉球王国評定所文書』第 10 巻（浦添市教育委員会、1994年）
琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』第 12 巻（浦添市教育委員会、1996年）
琉球王国評定所文書編集員会編『琉球王国評定所文書』第 17 巻（浦添市教育委員会、2001年）
琉球国絵図史料集編集委員会編『琉球国絵図史料集』第 3 集―天保絵図・首里古地図及び関連史料―（榕樹社、1994 年）
琉球政府編『沖縄県史料』第 11 巻資料編 1 上杉県令関係日誌（琉球政府、1965 年）
琉球政府編『沖縄縣史』第 12 巻 沖縄県関係各省公文書 1（国書刊行会、1966 年）
琉球政府編『沖縄県史』第 14 巻 資料編 4 雑纂 1（琉球政府、1965 年）
琉球政府編『沖縄県史』第 20 巻 資料編 10 沖縄県統計集成（琉球政府、1967 年）
「明治六年　僉議」（尚家文書 448 号、那覇市歴史博物館蔵）
「廻文」（尚家文書 458 号、那覇市歴史博物館蔵）
「案書 三冊」（尚家文書 465 号、那覇市歴史博物館）
「両先嶋御検使日記」（尚家文書 484 号、那覇市歴史博物館蔵）
「宮古嶋八重山嶋江冨川親方御検使之時日記」（尚家文書 487 号、那覇市歴史博物館蔵）。
「覚」（尚家文書 644 号、那覇市歴史博物館蔵）
「琉球藩戸籍総計」（尚家文書 659 号、那覇市歴史博物館蔵）
「琉球藩職分総計」（尚家文書 660 号、那覇市歴史博物館蔵）
「琉球藩管内職分総計」（尚家文書 661 号、那覇市歴史博物館蔵）
「明治九年琉球藩管内職分総計」（尚家文書 666 号、那覇市歴史博物館蔵）
『琉球国関係文書十三』（東京大学史料編纂所蔵）
『石室秘稿(琉球関係)』2 巻（国会図書館憲政資料室所蔵）
『明治十六年沖縄県統計書』（国立国会図書館蔵）
『日本帝国民籍戸口表』明治 19 年（国立国会図書館蔵）
『麻姓家譜(野崎家)』（那覇市歴史博物館蔵）

## 参考文献

安里進「近世琉球の漆器生産をめぐる問題点」（『漆工史』第 27 号、2004 年）
安里進「首里那覇鳥瞰図の年代設定と描かれた景観の虚実」（『近世城下絵図の景観分析・GIS 分析』古今書院、2019 年）
安里進「絵図と厨子からみた首里・那覇の人口増大と都市化をめぐる問題点」（『沖縄文化』―沖縄文化協会創設 70 周年記念誌―、沖縄文化協会、2020 年）
麻生伸一「近世琉球の職人集団と王府」（『琉球沖縄歴史』琉球沖縄歴史学会、2020 年）

安谷屋隆司「台風と沖縄の農業」(『台風―自然と風土―沖縄で台風を考える―』NPO 法人沖縄台風センター研究会、2004 年)
新保博・速水融・西川俊作『数量経済史入門―日本の前工業化社会』(日本評論社、1975 年)
安渓遊地編『西表島の農耕文化』(法政大学出版局、2007 年)
安場保吉「「新しい経済史」について」(『アメリカ研究』4 号、1970 年)
池野茂『山原船―水運の展開』(ロマン書房、1994 年)
石原俊『近代日本と小笠原諸島　移動民の島々と帝国』(平凡社、2007 年)
伊波普猷『沖縄歴史物語』初出 1947 年(平凡社、1998 年)
伊波普猷・真境名安興『琉球の五偉人』初出 1916 年(『真境名安興全集』第 4 巻、琉球新報社、1993 年)
上原兼善「琉球国における寛文改革の意義―いわゆる羽地「仕置」の性格をめぐって―」(『西日本史学会宮崎支部報』西日本史学会宮崎支部、1981 年)
上原兼善「17 世紀末期における琉球国の動向」(琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』第 6 巻、浦添市教育委員会、1991 年)
上原兼善「幕末期琉球国社会に関する覚書」(『九州文化史研究所紀要』第 37 号、九州大学九州文化史研究所、1992 年)
上原兼善『異国船来航と琉球王国』(名古屋大学出版、2020 年)
上原靜「琉球国と鋳銭」(『出土銭貨からみた環シナ海と琉球史―出土銭貨研究会第 15 回研究大会報告資料』出土銭貨研究会、2008 年)
上村俊雄「沖縄諸島出土の五銖銭」(『鹿大学史学』第 40 号、鹿児島大学、1992 年)
梅村又次「徳川時代の人口趨勢とその規制要因」(『経済研究』16 巻 2 号、1965 年)
岡崎陽一『人口統計学(増補改訂版)』(古今書院、1999 年)
上原兼善「寛永十二年のキリシタン改め」(『幕藩形成期の琉球支配』吉川弘文館、2001 年)
岡田泰男「経済史研究の方向―理論と歴史―」(『三田学会誌』第 74 巻第 5 号、1981 年)
尾口義男「薩摩藩と近世琉球国の人口―琉球人口データ及び近世前期の薩摩藩の社会動向に関する新たな史実を付加しての「薩摩藩の人口」補論―」(『黎明館調査研究報告』13 号、鹿児島県歴史資料センター黎明館、2000 年)
奥野彦六郎『沖縄の人事法制史』初出 1931 年(至言社、1977 年)
落合恵美子編『徳川日本の家族と地域性―歴史人口学との対話―』(ミネルヴァ書房、2015 年)
カール・ポランニー「自己調整的市場と擬制商品―労働、土地、貨幣」原著 1944 年(玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史』ちくま学芸文庫、2003 年)
鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』初出：1983 年(講談社学術文庫、2000 年)
鬼頭宏「近世日本の主食体系と人口変化」(『徳川社会からの展望―発展・構造・国際関係―』同文館、1989 年)
鬼頭宏『日本の歴史 19 文明としての江戸システム』(講談社、2002 年)
金光玉「幕末維新期薩摩藩の研究 ―流通を中心に」(一橋大学博士論文、1993 年)
金城功「沖縄の歴史―芋と甘蔗―」(『日本農書全集 月報(第 34 巻 農務帳・他)』農山漁村文化協会、1983 年)
岸本美緒『清代中国の物価と経済変動』(研文出版、1997 年)
岸本美緒「時代区分論の現在」初出 2002 年(『風俗と時代観―明清史論集 1』研文出版、2012 年)

金城正篤「「琉球処分」と農村問題」（『琉球処分論』沖縄タイムス社、1978 年）12 年）
金城宏「近世沖縄における流通構造の特質」（『商経論集』3(2)、沖縄国際大学、1975）
金城善「明治六年十二月十四日付け「戸籍総計表」―八重山島石垣間切石垣村の『頭数帳』の分析を通して―」（研究代表者：田里修『沖縄近代法の形成と展開―沖縄の特殊性と普遍性―』沖縄大学、2008 年）
金城善「近代沖縄における戸籍法の施行」（田里修・森謙二編『沖縄近代法の形成と展開』榕樹書林、2013 年）
来間泰男「近世琉球における夫役銭の意義」（『南島文化』35 号、沖縄国際大学南島文化研究所、2013 年）
来間泰男「琉球近世における貨幣流通」（『南島文化』第 36 号、沖縄国際大学南島文化研究所、2014 年）
来間泰男『沖縄の覚悟 基地・経済・“独立”』（日本経済評論社、2015 年）
来間泰男「近代の沖縄経済」（三大学院共同出版編集委員会編『北海道・鹿児島・沖縄の歴史と経済』日本経済評論社、2019 年）
グレゴリー・スミッツ（渡辺美季訳）『琉球王国の自画像―近世沖縄思想史』原著 1999 年（ぺりかん社、2011 年）
グレゴリー・スミッツ（田中アユ子・安野正士訳）「朽ちたる手縄にて馬を馳せるが如し―18 世紀における琉球王国の経済思想」原著 2010 年（川口浩・ベティーナ・グラムリヒ＝オカ編『日米欧からみた近世日本の経済思想』岩田書院、2013 年）
黒島為一「人頭税」（『新琉球史 近世編(下)』琉球新報社、1991 年）
黒田明伸『中華帝国の構造と世界経済』（名古屋大学出版会、1994 年）
黒田明伸『貨幣システムの世界史〈非対称性〉を読む』（岩波書店、2003 年）
小葉田淳「幕末、薩摩藩の鋳銭について」（『日本経済史の研究』同朋舎、1982 年）
小林茂『農耕・景観・災害―琉球列島の環境史―』（第一書房、2003 年）
斎藤修「飢饉と人口増加速度―18-19 世紀の日本―」（『経済研究』第 51 巻 1 号、一橋大学経済研究所、2000 年）
斎藤修「経済史はどのような学問か」（『一橋論叢』123 号、日本評論社、2000 年）
鎮目雅人『信用貨幣の展開―近世～現代の歴史実証』（慶応義塾大学出版会、2020 年）
嶋谷和彦「中世の模鋳銭生産―堺出土の銭鋳型を中心に―」（『考古学ジャーナル』372 号、ニュー・サイエンス社、1994 年）
J・R・ヒックス（新保博・渡辺文夫訳）『経済史の理論』原著 1969 年（講談社学術文庫、1995 年）
砂川玄正「近世時代後期における宮古の自然災害」（『平良市総合博物館紀要』第 1 号、平良市総合博物館、1994 年）
砂川玄正「村々の姿」（『宮古島市史』第 1 巻 通史編 みやこの歴史、宮古島市教育委員会、2012 年）
平良勝保「「子年の飢饉」に関する覚書」（『沖縄文化』66 号、沖縄文化協会、1986 年）
平良勝保「近世末期先島の貢布と市場・人口問題」（『南島史学』南島史学会、84 号、2016 年）
高木久史『日本中世貨幣史論』（校倉書房、2010 年）
多賀良寛「19 世紀における阮朝の通貨統合政策とベトナム銭の広域的流通」（『南方文化』38 号、2011 年）
高橋美由紀・黒須里美「近世日本の人口と気候」（中塚武監修、鎌谷かおる・渡辺浩一編『気

候変動から読み直す日本史 5 気候変動から近世をみなおす―数量・システム・技術』臨川書店、2020 年）
高宮廣衛・宋文薫「琉球弧および台湾出土の開元通宝―特に 7～12 世紀ごろの遺跡を中心に」（『南島文化』第 18 号、沖縄国際大学南島文化研究所、1996 年）
高良倉吉『琉球王国史の課題』（ひるぎ社、1989 年）
高良倉吉「海上交通史の諸相」（『新琉球史―近世編(下)』琉球新報社、1990 年）
高良倉吉「近世琉球における都市の論理」（『新しい琉球史像―安良城盛昭先生追悼論集―』榕樹社、1996 年）
高良倉吉「琉球史研究をめぐる 40 年」（『沖縄文化』第 40 巻 2 号通巻 100 号、2006 年）
竹岡敬温「物価史とエルネスト・ラブルース」（『『アナール学派』と社会史―「新しい歴史」へ向かって』同文館、1991 年）
田里友哲『沖縄の集落研究』（離宇宙社、1983 年）
舘稔『形式人口学』（古今書院、1960 年）
田名真之「資料紹介② 明治十二・十三年版『共武政表』について―人口問題を中心に―」（那覇市企画部市史編集室編『那覇市史だより』第 25・26・27 合併号、1984 年）
田名真之『沖縄近世史の諸相』（ひるぎ社、1992 年）
田名真之「平等所学校所と科試」（高良倉吉・豊見山和行・真栄平房昭編『新しい琉球史像―安良城盛昭先生追悼論集』榕樹書林、1996 年）
田名真之「戸数と人口」（沖縄市企画部平和文化振興課編『沖縄市史』第 7 巻 資料編 6・下、沖縄市役所、1997 年）
玉津博克「近世前半期の八重山―人口動態と村落編成を通して」（『八重山文化論集』第 2 号、1980 年）
知念隆博「清朝銭について」（『沖縄埋文研究』2 号、沖縄県立埋蔵文化財センター、2004 年）
都築晶子「蔡温の「国」の思想―唐と大和の間で―」（『人文學報』86 号、京都大学、2002 年）
デヴィッド・グレーバー(酒井隆史監訳／高祖岩三郎・佐々木夏子訳)『負債論―貨幣と暴力の 500 年』原著 2011 年（以文社、2016 年）
渡口真清『近世の琉球』（法政大学出版、1975 年）
徳永和喜『偽金づくりと明治維新』（新人物往来社、2010 年）
得能壽美『近世八重山の民衆生活史―石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク―』（榕樹書林、2007 年）
得能壽美「近世八重山への王府布達文書「規模帳」「公事帳」の成立過程」（『沖縄文化研究』43 号、法政大学沖縄文化研究所、2016 年）
豊見山和行「王府の仕明政策と久護家文書」（『名護市史資料編五・文献資料集別冊一 屋部久護家文書』名護市教育委員会、1999 年）
豊見山和行「琉球・沖縄史の世界」（同編『琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003 年）
豊見山和行『琉球王国の外交と王権』（吉川弘文館、2004 年）
豊見山和行「村（シマ）社会の諸相」（安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭編『沖縄県の歴史（第 2 版）』山川出版社、2010 年）
豊見山和行「土地所有・雑物・喰実畑―近世琉球の年貢賦課と百姓の生業形態」（松井健・名和克郎・野林厚志編『グローバリゼーションと〈生きる世界〉―生業からみた人類学的現在』昭和堂、2011 年）

豊見山和行「前近代琉球の災害史について―環境社会史の視座から―」（沖縄・奄美島嶼社会における災害・防災の歴史的変遷に関する包括的研究』2011 年度トヨタ財団研究助成採択プログラム、2013 年）
豊見山和行「琉球王府による蘇鉄政策の展開」（『ソテツをみなおす 奄美・沖縄の蘇鉄文化誌』ボーダーインク、2015 年）
豊見山和行「島嶼国・琉球の自律性について―国用・食料確保・農政の視点から―」（池上大祐・杉村泰彦・藤田陽子・本村真編『島嶼地域科学という挑戦』ボーダーインク、2019 年）
豊見山和行「琉球国後期における公定価格制度について―「諸物代付帳」と「多良間島諸物代付帳」を中心に―」（『琉球アジア文化論集』琉球大学人文社会学部、第 6 号、2020 年）
仲地哲夫「薩摩支配における特権商人の役割」（『沖縄歴史研究』第 10 号、沖縄歴史研究会、1973 年）
仲地哲夫「琉球史における民衆の役割(一)」（『南島文化』19 号、1997 年）
仲地哲夫「琉球史における民衆の役割(二)」（『南島文化』22 号、2000 年）
仲地哲夫「琉球史における民衆の役割(三)」（『南島文化』23 号、2001 年）
仲地哲夫「琉球史における民衆の役割(四)」（『南島文化』28 号、2006 年）
仲地哲夫「近世における琉球・薩摩間の商品流通―1680 年代～1810 年代を中心に―」（『九州文化史研究紀要』第 36 号、九州大学九州文化史研究所、1991 年）
仲地哲夫「近世琉球のウェーキ（資産家）と身売り百姓」（『南島文化』29 号、2007 年）
仲地宗俊・福村光敏「明治期の『沖縄県統計書』編纂と周辺統計書」（『地域と文化』第 51 号、ひるぎ社、1988 年）
中鉢良護「琉球列島の畑作農耕文化―宮古・八重山の「伝統的」畑作様式の成立―」（沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史』各論編 第 4 巻 近世、沖縄県教育委員会、2005 年）
仲原善忠「沖縄現代産業経済史」初出 1952 年（『仲原善忠全集』第 1 巻、沖縄タイムス社、1977 年）
仲原善忠「砂糖の来歴」初出 1963（『仲原善忠全集』第 1 巻、沖縄タイムス社、1977 年）
那覇市企画部文化振興課編『那覇市史』通史篇第 1 巻 前近代史（那覇市役所、1985 年）
西里喜行「琉球処分前夜の通貨問題―文替り考」（『琉球の歴史と文化―山本弘文博士還暦記念集』本邦書籍、1985 年）
西里喜行「近世末期の内政問題と対外関係」（沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史』各論編 第 4 巻 近世、沖縄県教育委員会、2005 年）
日本銀行調査局編『朝鮮・琉球貨幣概要』（日本銀行調査局、1969 年）
日本銀行調査局編『図録 日本の貨幣』第 4 巻（東洋経済新報社、1973 年）
橋本雄「撰銭令と列島内外の銭貨流通―“銭の道”古琉球を位置づける試み―」（『出土銭貨』9 号、出土銭貨研究会、1998 年）
速水融・鬼頭宏「庶民の歴史民勢学」（『日本経済史 2 近代成長の胎動』岩波書店、1989 年）
速水融・小嶋美代子『大正デモグラフィ 歴史人口学でみた狭間の時代』（文藝春秋、2004 年）
速水融『歴史人口学研究―新しい近世日本像』（藤原書店、2009 年）
原田敏丸・宮本又次編『歴史のなかの物価―前工業化社会の物価と経済発展―』（同文館、1985 年）
ピエール・グベール（遅塚忠躬・藤田苑子訳）『歴史人口学序説』原著 1960 年（岩波書店、

1992 年）
東恩納寛惇「沖縄渉外史」初出 1951 年（『東恩納寛惇全集』1 巻、第一書房、1978 年）
東恩納寛惇『南島通貨志の研究』初出 1956 年（『東恩納寛惇全集』4 巻、第一書房、1979 年）
東恩納寛惇「文引合の話」初出 1936 年（琉球新報社編『東恩納寛惇全集』4、第一書房、1979 年）
東恩納寛惇『南島風土記』初出 1950 年（『東恩納寛惇全集』7 巻、第一書房、1980 年）
比嘉春潮『比嘉春潮全集』第 1 巻 歴史篇Ⅰ（沖縄タイムス社、1971 年）
比嘉春潮「沖縄における明治初年の「文替り」」初出 1969 年（『比嘉春潮全集』第 2 巻 歴史篇Ⅱ、沖縄タイムス社、1971 年）
百瀬弘「清代に於ける西班牙弗の流通」初出 1936 年（『明清社会経済史研究』研文出版、1980 年）
深澤秋人「近世琉球における綿子の生産―久米島への供給体制を中心に―」（菊池勇夫・真栄平房昭編『近世史 地史フォーラム一 列島史の南と北』吉川弘文館、2004 年）
福仲憲「近世琉球の農業と農書」（『日本農書全集 34 農務帳・他』農山漁村文化協会、1983 年）
古川顕「ミッチェル・イネス―信用貨幣の重視と経済学の巨星への挑戦」（『貨幣論革新者たち』ナカヌシヤ出版、2020 年）
真栄平房昭「鎖国形成期のキリシタン禁制と琉球」（箭内健次編『鎖国日本と国際交流 上巻』吉川弘文館、1988 年）
真栄平房昭「薩摩藩の海事政策と琉球支配」初出 1993（『琉球海域史論 下』榕樹書林、2020 年）
真栄平房昭「琉球貿易の構造と流通ネットワーク」（豊見山和行編『琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003 年）
真栄平房昭「近世の琉球社会と「飢饉」―日記から読み解く歴史像―」（前掲『沖縄の災害情報に関する歴史文献を主体とした総合的研究』）
山内昌和「1920～1935 年の沖縄県の死亡力と出生力―死亡数と出生数の推計とその結果の考察」（『人口問題研究』63 号、国立社会保障・人口問題研究所、2007 年）
マルサス（斉藤悦則訳）『人口論』原著：1798 年（光文社古典新訳文庫、2011 年）
源武雄「近世沖縄人口史の謎」初出 1964 年（『続・琉球歴史夜話』沖縄文教出版社、1974 年）
宮城弘樹「近世琉球の出土無文銭再考」（『宮田進一氏追悼集』北陸信越出土銭貨研究会、2012 年）
宮城弘樹「中世の銭と琉球」（沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史』各論編 古琉球、沖縄県教育委員会、2019 年）
宮城弘樹「琉球列島における貨幣認識と貨幣利用の多様性」（『南島考古』第 36 号、沖縄考古学会、2017 年）
三輪大介・平良勝保「琉球列島における人々の営みと自然環境の変容」（『琉球列島の環境問題 「復帰」40 年・持続可能なシマ社会へ』高文研、2012 年）
安田保「琉球通宝の鋳銭と安田轍蔵(上)」（『九州文化史研究紀要』第 42・43 号、九州大学文化史資料室、1999 年）
山崎隆三『近世物価史研究』（塙書房、1983 年）
山田浩世「近世琉球・奄美における災害と気候変動問題―1780・1830 年代を中心に―」（前

掲『沖縄・奄美島嶼社会における災害・防災の歴史的変遷に関する包括的研究』)
山田浩世「自然災害と近世後期の琉球社会」(沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史』図説編 前近代、沖縄県教育委員会、2019 年)
山本弘文『南島経済史の研究』(法政大学出版局、1999 年)
吉岡康鴨・門上秀叡「琉球の貨幣をめぐる問題」(『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社、2011 年)
与那国暹『ウェーバーの社会理論と沖縄』(第一書房、1993 年)
琉球政府編『沖縄県史(復刻版)』3 経済(国書刊行会、1989 年)
渡辺美季『近世琉球と中日関係』(吉川弘文館、2012 年)